

# こども国際PBLに見られる言語活動

## —2024年予備調査報告—

堀尾 佳以 (宇都宮大学)

### 1. はじめに

こども国際Problem Based Learning (PBL) は工学研究者が開発した最新の「ものづくり」教材を用いてSTEAMを学ぶ機会を創出するプログラムである。特に参加者に特徴があり、多国籍の幼児と小学校低学年児童を対象としており、STEAMを通じた多文化・多言語接触における言語活動を分析する異分野融合研究を進めている。2024年は日本人がマレーシアへ行き、現地で交流活動を行なった。このSTEAMに親しむ場面において、日本とマレーシアの参加者たちは、多言語・多文化の影響を受けつつどのような言語活動を行ったのだろうか。そして「多文化相互理解」はどのように進んだのだろうか。

### 2. 研究目的

本研究の目的は、参加者である日本とマレーシアの幼児および小学校低学年（以下、こども）たちが、相互の母語が分からない場面において、どのようなストラテジーを使用するのかを明らかにすることである。

具体的には、こどもたちが目標達成や問題解決のために相手とどうやって協力関係を築くのか、そのために何をどのように伝えるのだろうか。そして、その過程においてどのようなコミュニケーションをとるのか。まずはこどもたちの言語活動を観察・記録し、分析を進めている。本研究は今後5年間の実践研究を予定しており、集大成として多言語・多文化接触場面におけるコミュニケーションストラテジーを分類することを最終目標としている。

### 3. 先行研究と研究動向

こどものコミュニケーションに関する研究のうち、井濃内・井出(2020)は保育園と外国籍保護者の「わかりあえない」状況とその場合のコミュニケーションのあり方を追究している。本PBLでも「わかりあえない」場面がいくつも発生したが、「ことばの壁」が暗黙知や共有言語資源が少ないことなど鋭い指摘は調査準備に役立った。

保育園や教室での行動を観察した上での言語発達に言及した増田(2011)は「子どもの言葉を聴き取ると同時に、どのような働きかけをすることが、子どもの言語を育てていくことになる」のかを問い、「一番大事なことは、そうした子どもの会話を広げていき、他の子どもに問いかけていくことである」と結論づけた。

また、こどものコミュニケーションに関する研究では、大伴(2008)が「集団場面でのコミュニケーションのチェック(表2)」で示したコミュニケーションの自発性、状況・言語理解、意思疎通、ルール理解といった項目が本研究を始めるにあたり、参考になった。

では、本プロジェクトではどのようなコミュニケーションが見られたのだろうか。実際に日本とマレーシアのこどもたちの接触場面を記録し、分析していく。

### 4. 研究内容および方法

#### 4.1 研究内容

本研究では2024年8月にマレーシアで実施した「こども国際PBL」で得られた言語活動に関する調査結果を公表する。この結果をもとに、今後どのようなアプローチをしていくのか検討する。

## 4.2 研究方法

研究対象は、こども国際 PBL プログラム参加者である小学生4名および保育園児4名（日本人マレーシア人各2名ずつ）である。国籍・言語・文化の異なるこども達が課題解決型学習で学びながら、こども達が得る知識・体験にはどのような傾向があり、どのような問題が起こるのか。接触場面で見られるコミュニケーションについて録画・録音し、言語を用いた会話だけでなく非言語コミュニケーションやコンテキストを含めた分析を行う。今回の参加者の年齢や母語については表1の通りである。

表1. 参加者の属性

	日本	マレーシア
年齢(学年)	J1 7歳 (小2) J2 6歳 (小1) J3 4歳 (年中) J4 4歳 (年中)	M1 9歳 (小3) M2 8歳 (小3) M3 5歳 (年長) M4 5歳 (年長)
母語/その他	J1 日本語/マレー語方言 <sup>①</sup> J2 日本語 J3 日本語 J4 日本語	M1 マレー語/英語 M2 マレー語/英語 M3 マレー語/英語 M4 マレー語
環境 海外歴など	J1 父:マレーシア人 J2 母:イタリア留学, 外国人との接触 <sup>②</sup> J3 父:アメリカ留学 J4 父:マレーシア人	M1 日本滞在歴あり, 両親:日本留学 M2 M3 両親:日本留学 M4

## 5. 調査結果

2024年8月に実施したPBLでは、次のスケジュールで様々なPBLに取り組んだ(表2)。

表2. こども国際PBL2024 スケジュール

	午前	午後
1日目	—	アイスブレイク
2日目	コンパス(A4に最大限)	ひと筆お絵描き
3日目	光の三原色	絵で伝言ゲーム
4日目	現地視察	空中ディスプレイ
5日目	モバイル 光と影	—

次から、PBLで見られたコミュニケーションの事例について、具体的に見ていく。

### 5.1 円滑なコミュニケーションの例

小学生(日本人1名=J1, マレーシア人1名=M1)のグループでは、円滑なコミュニケーションと双方向の積極的な働きかけが見られた。1人が円を描き、手助けしたりアドバイスしながら作業を進めていた(図1)。コンパスで描いた円が若干重なったことを指摘した場面でのコミュニケーションが印象的であった。

M1: ジェスチャーで指差す

J1: Tapo tapo (大丈夫, 大丈夫)

M1: マレー語の方言に驚く, 笑顔

※ 網掛け部分は非言語コミュニケーション



図1. 協力しながら円を描く様子

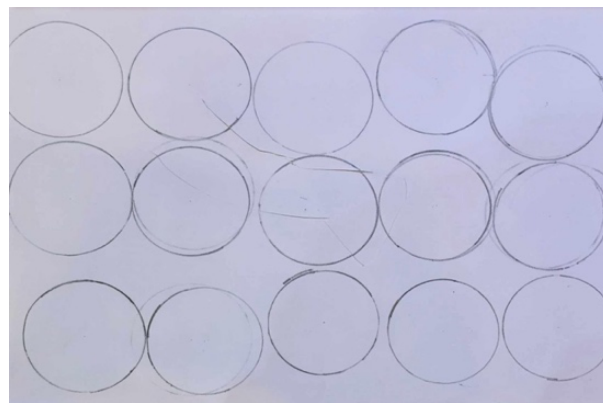


図2. A4用紙に最大限の円を描く

一緒に相談・協力して1枚の紙に円を描いていった結果が図2である。

黙々と2人で作業を進める合間にも、M1が動画記録者に向けてサムズアップをして順調に作業が進んでいることをアピールしている場面も見られた。この2人の円滑なコミュニケーションについては、共通言語と呼べるほどの語学力がない状況ではあるものの、大伴(2008)のいう「コミュニケーションの自発性、状況・言語理解、意思疎通、ルール理解」が全てバランスよく行えた結果と言えるのではないだろうか。

もうひと組、STEAM活動で良い結果を出せたチームがあった。日本人小学生1名、マレーシア人幼児1名の組み合わせで、ひと筆お絵描きの際、図3のように2人で交互に筆を進めながらも一つの絵(図4)を完成させることができた。



図3. 交互に絵を描く様子



図4. 完成した「一筆お絵描き」

この活動を進めていく際、2人の間に発話は見られなかったものの、ペンを受け渡したり、アイコンタクトを取ったりといった非言語でのコミュニケーションが行われていた。ここでも言語理解という項目は該当しなかったものの、「コミュニケーションの自発性、状況理解、意思疎通、ルール理解」が成立しており、良い成果を生む要因になったと考えられる。

今回のPBL参加者は全部で8人おり、テーマは6種類実施した。参加者の組み合わせを毎回変更してみたが、円滑なコミュニケーションにより成果が出せたのは少数であった。

## 5.2 コミュニケーション不成立の要因

幼児(日本人2名、マレーシア人2名)は個々の活動には参加するものの、人見知り・場所見知りが見られ、幼児同士でのコミュニケーション成立には至らなかった。こどもたちの様子を見てみると、コミュニケーションが成り立たない場面ではいくつかの要因があると考えられる。

1つ目は、協働・共修に関する認識不足である。「課題を協力して進める」という認識がなく、1人で全てのことが出来てしまう小学生が単独で活動を進め、幼児との協力に挑戦しなかった場面があった。これはPBLに参加する前の段階で「母国以外の人と一緒にコミュニケーションしながら活動に参加する」ことを参加者全員に認識してもらう必要があった。今回の結果から、「協働・共修」が自然に生まれる場合もあれば、コミュニケーションを取らずに活動をすることもある、ということが分かった。

2つ目は、参加者の年齢や性格によるものである。ある幼児は PBL 活動中に見えなくなった保護者を探し、不安になって愚図ってしまい、そのグループは活動できなくなってしまった。他にも、恥ずかしがったり仲良くなるまで時間がかかることもあったため、こどもの性格や状況によっては一つの活動に集中して参加できない場合があることが分かった。

3つ目は課題の難しさである。小学生には難なく取り組めるものであっても未就学児には難しい場合もあるため、そこで協力するのではないかと考えたが、未就学児も自ら参加したい・自分の手で作品を作りたいという様子が見られたため、コミュニケーションの創出には繋がられなかった。発達段階に沿った課題を与えるだけでなく、コミュニケーションを促す手法を検討する必要があると考えられる。

今回の PBL で見られたものだけでなく、他の要因も可能性があるため、動画資料の分析を進めていく。

### 5.3 STEAM 以外の接触場面におけるコミュニケーション

PBL の待ち時間に、こどもたちが列を作って待っている間に、日本人の「くすぐる」＝ボディタッチによるコミュニケーションで追いかけてこが始まり、仲良く遊ぶ場面が見られた(図5)。言語は全く使わなかったが、シャイでなかなか溶け込めなかったこどもは活動終了後に「楽しかった。またあの子と遊びたい」と話していた。



図5. 追いかけてこ

### 5.4 考察

コミュニケーションが成立した活動や組み合わせで、どのような言語活動があったのか確認すると、やはり共通言語がないため会話はほとんど成立していなかった。しかし、ノンバーバルコミュニケーションはいくつも発現していた。特に【指差し・アイコンタクト・笑顔・ボディタッチ】などが頻出しているグループほど、良い結果が得られた。一方で、ノンバーバルでのコミュニケーションも見られないグループは、意思疎通がより困難であるため、成果が出にくかったのではないだろうか。

円滑なコミュニケーションにより成果が出ている場合でも、その組み合わせのこども達がより良い人間関係を構築できたかという点、必ずしもそうとは言えない。むしろ、PBL 以外での様々な遊びを通して、良い関係で楽しく過ごすことができていた例の方が多いようである。日本からの参加者は夏休みで現地に赴いているため毎回活動することができたが、マレーシア側参加者が学期期間中で必ずしも毎回参加できるわけではないことも、人間関係構築に結び付かなかった要因であろう。

## 6. 結論

これまで幼児や小学校低学年児童が PBL 活動を行っている間にどのようなコミュニケーションが見られるのか、特にどのような言語活動が見られるのかは未解明の部分が多かった。今回の調査でコミュニケーションが成立する場面がいくつか見られたため、今後はその成功要因を詳細に分析することにより、どのような活動や指導がより良いコミュニケーションを生むのか解明していきたい。

**謝辞** 本研究は JSPS 科研費(海外連携研究) 23KK0039 の助成を受けたものです。

### 参考文献

- 井濃内 歩・井出 里咲子(2020). 保育園と外国人保護者のコミュニケーション
- 大伴潔(2008). 言語・コミュニケーションと子どもの理解: 言語聴覚士の立場から コミュニケーション障害学 25(1), 43-48.
- 狩野裕子・井出 里咲子 (2023). 保育園と外国籍家族をつなげるプロジェクト型活動から考えることばの「道具性」―「ことば観」の変容を捉える実践記録から―
- 増田修治(2011). 子どもの言葉を育てる保育とそのための環境作り - 親を巻き込む保育実践(特別授業 対話とコミュニケーションのなかで育つ学力と生きる力) 和光愛学現代人間学部紀要 4, 165-181.